

島根・トップコーチ

(第81号)平成22年2月26日

【発行】 財団法人 島根県体育協会

【担当課】 競技スポーツ課

〒690-0016

島根県松江市上乃木10丁目4番2号

島根県立水泳プール内

TEL 0852(60)5052

<http://www.shimane-sports.or.jp>

【第81号発刊にあたって】

第81号は島根サッカー界をリードして、今日の隆盛に貢献された、岩成 潔氏(現・県サッカー協会専務理事)にご登場いただきました。

岩成氏は高校の指導者として数々の全国大会出場を果たされましたが、現在では島根のサッカー協会の運営と普及・強化に尽力され、その取り組みは全国の注目を浴びています。

【プロフィール】

昭和44年 順天堂大学卒業
昭和44年 益田農林高校勤務
昭和49年 出雲高校勤務
昭和53年 松江工業高校勤務
昭和55年 益田農林高校勤務
昭和58年 松江農林高校勤務
平成 3年 松江南高校勤務
平成10年 平田高校勤務
平成18年 定年退職
平成18年(社)島根県サッカー協会勤務
平成20年 1月 退職

【主な指導実績】

競技成績

全国大会出場

高校総体

益田農林高校4回、松江工業高校1回
国体

益田農林高校1回、県選抜1回(くに
びき国体監督)

高校選手権

益田農林高校2回 東中国〔岡山、鳥
取、島根〕の代表、西中国〔山口、島
根〕の代表

中国大会出場

益田農林高校2回、出雲高校2回、松
江南高校3回、平田高校1回

指導資格取得

昭和46年 日本サッカー協会のコーチン
グスクールを受講(約1ヶ月間)

日本サッカー協会A級の資格取得

日本体育協会上級コーチの資格取得

(社)島根県サッカー協会役員歴

事務局長4年間

副理事長(専務理事代行)7年間

現在専務理事7年目

中国サッカー協会副理事長4年目

『サッカー協会の取組み』

社団法人 島根県サッカー協会
専務理事 岩成 潔

【はじめに】

突然、島根県体育協会から原稿依頼があり「ピ
ックリ」。実績らしい実績もなく、私ができるこ
とは高校教員として奉職してから退職までずっ
とサッカー部の顧問であったこと、県のサッカ
ー協会に20年近く役員として参加させていただ
いたことの2点しかない。

最早、私のサッカー指導に対する古い考え、
仕方では「島根・トップコーチ」としての指導理
論や方法にそぐわないし、皆様に強調するよう
な材料も見あたらない、よって主旨とは異なる
と思いますがお許し願って県サッカー協会の取
組み等の一端を紹介してみたいと思います。

【初任地】

初任地の益田農林高校は熱血漢、情熱の塊の
伊藤實先生(現在県協会の副会長)が熱心に指
導され強くされていた、そこに私が入り込んだ
格好であったが、当時の大きな目標は島根国体
で益田にサッカー競技を誘致することであった。
そのためまず、益田農林高校を中心に益田のサ
ッカーが強くなければならない。次に、いつで
もサッカーのゲームができるグラウンドの確保等、
環境の整備をすることであった。さらにサッカ
ーに係われるスタッフを増やすことであった。
こうした目標の中で自チームの強化(おそらく
当時県内の高校サッカーではNO1の練習量、
県外遠征の多さ、後援会、OB会、父母の会の
組織による援助があったと思う)小学生のサッ

カースクール、指導者の育成等を行うサッカー漬けの毎日でした。こうしたことがサッカーにのめり込む大きな要因になったと同時に、益田では私を支えてくださった伊藤寛先生という中心軸があったからこそ指導者としての素地ができたと思う、後には先生のご尽力でサッカーは益田、サッカーの街と言われるほどになった。

【サッカーのあらまし】

世界のサッカーはヨーロッパ対南米の対抗の図式で一つの文化として歩み進化し続けている。北中米、アジア、アフリカは発展途上であるがまだまだと言った感が強い、今後どうなるでしょう。

日本は東京、メキシコ（3位）オリンピックでブームが起きたがその後長い間低迷し、ようやく近年になってプロリーグ（Jリーグ）ができ、ワールドカップにも出場できるようになってきた。

大きく変わったのは日韓のワールドカップの開催でした。まだ野球の比ではないが人気スポーツとして認知され、裾野も広がった。また開催での余剰金もでき、Jハウス（日本サッカー協会のビル）の建設や各県の施設の整備にも助成された。

本県でも松江の市営陸上競技場の補助グラウンドに人工芝グラウンド（Sピッチ）、照明設備、クラブハウス、屋根付フットボール場（子ども広場）の建設に助成され、現在はフットボールセンターの拠点として盛りたくさんの取り組みを行っている。

【日本協会の取り組み】

日本サッカー協会は中長期の展望を見据えた画期的な2005年宣言（理念、ビジョン、サッカーファミリーの拡充など）を発表した。この宣言に基づいた様々なミッションで各都道府県を活性化させ、物心両面の支援を行ないだした。

例えば強化に関する支援は、キッズ年代「キッズプログラム」活動を全ての市町村で実施することの推進。小学校年代 生活圏におけるリーグ戦、中学校・高校年代 リーグ戦の推進によりこれまでは出場機会に恵まれなかった子どもたちに、より多くの公式大会への出場チャンスを与えた。またエリート養成システムとしてキッズ年代、小学校年代、中学校年代の一貫したエリート養成システムの確立。女子サッカーの競技人口の増加や各年代との連携にも力

を注いでいる。

一方グラウンドを芝生にするための、グリーンプロジェクトを全国展開で推進し、幼稚園、保育所、小学校の校庭が猛烈な勢いで緑のグラウンドに変わってきている。施行も管理も比較的簡単で手間もかからない、ポット苗方式で行われています。さらに今はスポーツマネージメントの強化、社会貢献活動するなど沢山の事業を行っている。

【夢があるから強くなる】を合い言葉に「2015年には世界のトップ10」になり、2018年又は2022年に日本でワールドカップを単独開催すること、2050年までにはワールドカップで優勝するという大きな希望や夢に向かっての動きとなっている。

【県協会の主な取り組み】

（社）島根県サッカー協会の概略は次の通り。

県協会の規模と概要

- ・日本協会登録者数（2009年度）
チーム 240
選手7,050名（監督含む）
フットサル1,664名 合計8,714名
内訳

種別	チーム	選手	種別	チーム	選手
1 種 (社会人)	92	1940	女子	6	133
2 種 (高校生)	31	1078	監督		(100)
3 種 (中学生)	42	1598	フットサル		
4 種 (小学生)	64	2225	(一般)		823
シニア	5	76	(15歳以下)		841

- ・運営
県協会は（支部は松江、出雲、浜田、益田の4支部がある）支部の支えで運営されている。
県協会役員は理事（会長1名、副会長4名を含む）25名と監事2名の構成。
事務所2カ所 常勤職員2名 パート職員4名 アルバイト若干名
総予算額 平成21年度 約9千万円
（平成8年は1千7百万円でした）
- ・実績
（2009年6月30日発刊のサッカーダイジェストより抜粋）
全国ランキング（人口比等による）

総合29位(下記の ~ をトータルポイント化したもの)

- 日本協会登録率(1位) サッカーどころ静岡県を抜き堂々の第1位
- Jリーガー輩出率(28位) 5名輩出
- 日本代表輩出率(10位) 過去10年で2名輩出
- アマチュア大会成績総合ランキング(全てのアマチュアの大会をポイント化して集約したもの)(47位)
- スタジアム充実度(39位)(JFLの試合開催規模の3,000人収容をベースにしたもの)

取り組んでいる事業

本県では残念ながらJを目指すチームが現われていない、いつの日か現われることを願っている、現在行っている事業は「揺りかごから墓場まで」のイメージで男性も女性も、幼児からお年寄りまで。サッカーやスポーツを生涯楽しめる環境づくりをしているところです。

基礎づくりのために次のようなことも行っている。

事業	主な内容
幼児年代普及 (県内各所で開催)	親子サッカー、スポーツお届け隊 (保育所・幼稚園巡回) キッズスクール 主にスポーツの楽しさ、遊び方を伝える。
クリーンプロジェクト(日本サッカー協会と連携)	小学校、幼稚園、保育所、公民館等を芝生化し、新たなコミニティーの場をつくる。県内各所から芝生化の希望が多い。
こころのプロジェクト(日本サッカー協会と連携)	「夢先生」として元Jリーガー、日本代表選手を小学校に派遣 本県出身の元日本代表選手、小村徳男氏も派遣。
教養・健康促進 (外部講師に依頼する)	マネジメント・カレッジ開講、食育講習会、女性向け文化教室ジョギング、ヨガ等健康運動の場の提供。
環境・エコ	エコバックを作成提供、運動施設の清掃や除草。

技術委員会

・組織

技術委員長統括 メンバーは4支部の技術委員長、各種別技術委員長、県協会、規律委員長等で構成。

・指導者(平成21年度の有資格者の一覧)

S級	A級	B級	C級	D級
0人	7人	27人	181人	260人

・主な活動

指導者の育成、有資格者のリフレッシュ講習会、各種研修会 優秀選手発掘のためのトレーニングセンター活動(以後トレセンと呼ぶ)等、日本サッカー協会の指針に基づいて、県の技術委員会で協議しながら事業を行う。

・トレセン活動

小・中・高校生を対象としたトレセンの仕組み(それぞれの種別で実施)

各支部でのトレセン 県トレセン
(各支部で選考) (県で選考)

中国地域トレセン ナショナルトレセン

(中国地域で選考)(年代別日本代表の選考)

・課題

技術委員会の地道な努力が実り、ここ近年、中学生年代で優秀な選手を輩出しているが、かなりの選手が県外のJクラブや有名高校に流出し、国体選抜チームの大きな痛手となっている。本県では毎月あるいは毎週のようにどこかでトレセン活動が行われている。

これが選手育成の柱になりつつあるが自チームでの指導や練習方法にかなりの温度差がある。

・これから

常勤職員1名が(小川秀樹氏 ドイツ・日本のA級の有資格者)配置でき、いつでも受講者の都合に合わせて資格取得の講習会ができるようになった。またドイツで元15,16,17歳以下の代表監督ヨルグ・ダニエル氏(3月末再度来県)との交流ができドイツの資格も取れるようになったし、強化方法や育成の環境づくり等のアドバイスを受けることになった。

今後は国際的な視点で取り組んでいきたい。

【感動の一コマ】

教員生活最後の赴任したのは平田高校でした。それまでは常に強豪チームに挙げられていた松江南高校、部員約100名で満たされた中での指導であった。平田高校は同好会から部に昇格したばかりで中学校のサッカー経験者たった2名、他の部員も寄せ集めで全くボール扱いが出来ない状況、普段の練習場もテニスコートの跡地か近くの公園の空き地でした。練習試合も近隣の高校にお願いしても2軍か3軍ばかり、それでも大差で負ける有様、何とかならないかと思いついたのが昔型の蹴る、走る、の

サッカー、部員を前に「サッカーはギャンブル性の強い競技だ、勝ち上がるための最低条件はPK戦で勝つこと、1点差の試合は勝っていれば逃げ切る、負けていればPK戦に持ち込む、それ以外は負けだ、今日から原始サッカーをやるがついてくるか」というようなことを言ったと思う。

素人軍団にはあれもこれもやってもできないから、次の三つのことを徹底しておこなった。走る量を増やす(今走っている量の倍を走る)、ボールが蹴れる(今より10M遠くに蹴る)、ボールを止める(相手より早くボールに触る)、あと毎日の日課としてPKとGKの練習を行った。毎日毎日、同じ事の繰り返しであった、後々思うにあまりサッカーを知らない選手だったから良くついてやってくれたと思う。

僅か1年足らずであったが、かなり力もつき、幸運にも中国大会県予選で接戦を制止、3位で中国大会に出場できた。おまけで中国大会でも1回戦を勝ちベスト8になった。

ゼロからのスタートで選手(生徒)の素直な気持ち、ひたむきな努力でここまで引き上げてくれた平田高校生の凄さを改めて感じ取ったところです。このことは過去いくつかの全国大会出場より増して感激し、指導者冥利つきの思いがした。最後の赴任先のできごとで、私の冥土へのよいお土産ができたと思っている。

【終わりに】

島根・トップコーチとはかけ離れた、とりとめのない文章になってしまいました、お許しください。今、サッカー協会ではスポーツ振興のためにいろいろな取組みにチャレンジしています。サッカーさえ良ければ良い、サッカーの一人勝ちという考えは毛頭ありません、できれば他の競技団体の方々等と談笑でもさせていただければ『思わぬきっかけで、いいアイデアが生まれ』、共同して新たなイベント等の取組みができるかも知れませんが、是非ご一報、お越しをお待ちしています。

連絡先

(社) 島根県サッカー協会・事務所

(松江市黒田町454-9)

TEL 0852-32-4673

(社) 島根県サッカー協会・クラブハウス

(松江市営陸上競技場の補助競技場内)

TEL 0852 61 2112

勝手でしたが紙面をお借りして、ご案内させ

ていただき終わりにしたいと思います。

今月のことば

「覚悟」ということ

トップコーチ養成ゼミで、パネラー宮本善行氏の話のなかに、「くにびき国体では開催県としての覚悟があり、それが選手・指導者を育てた」という言葉がありました。この言葉に私も同感する者の一人として、557年のくにびき国体を回想しました。

国体が近づくにつれて、県民の期待と機運が高まり、天皇杯獲得や各種目の優勝が話題にのぼりだしました。逃げるに逃げられない重たい心境で本番一年前を迎えたことを覚えています。

その二・三年前までは国体で戦うイメージが湧かないまま、黙々と頑張っていたものが、一種のひらき直りと言う「覚悟」が固まるにつれて、戦略・戦術・育成のイメージが明確になったことを思い出します。

ある選抜チームは自分の高校からの総体予選を捨てて国体に賭けた話や、殆どのチームが土曜の午後から日曜日にかけて県外遠征を繰り返したこと等。それも、周囲の期待を背負った「覚悟」がもたらした行為だったと思います。

あの国体は、一生懸命に頑張りながらも、逃げ道を探している自分に、「人間、覚悟さえ固まれば、選手として、指導者として、人として強くなれる」ことを教えてくれましたし、立ち足かかる様々な限界点を乗り越えさせてくれました。

今、バンクーバーで冬季オリンピックが行われていますが、スケートの男子500Mで長島圭一郎選手と加藤条治選手が銀メダルと銅メダルに輝きました。彼等を指導した今村監督は長野オリンピックで清水宏保選手を金メダルに導いた名監督ですが、不況の今、大きな重圧と戦いながらも、私を支えたものは「覚悟」であったと言いました。

また、川口悠子選手(フィギュア・ペア)はロシアの国籍を取得して、オリンピック出場の夢を叶え、金メダルへ挑戦しました。彼女にも計り知れない苦悩があったと思いますが、やはり彼女をここまで動かしたのは「覚悟」ではなかったでしょうか。

競技力向上統括アドバイザー
荊尾 俊